

少ない水でもOK、海水も使える

震災で改良、泡の消火剤



2013年8月、宮城県気仙沼市での試験放水(画像提供:モリタ)

消防車の製造大手「モリタ」(兵庫県三田市)は、少ない水や海水でも十分威力を発揮する消火剤を開発した。阪神・淡路大震災では水が確保できず、東日本大震災では津波で河川に海水が流れ込んだ。大災害で想定外の状況に直面しても、迅速に消火活動ができるように開発したという。

開発を担った坂本直久さん(55)は23年前、火に包まれた神戸の街で、消火栓から水が出ず、消火活動がなかなか進まない様子をテレビで見た。「水がなかったらどうするのか考えさせられた」と振り返る。

日本では市街地ならば消火栓があり、川の水も使える。通常は水を集める苦労はない。一方、欧州では水に

空気と薬剤を混ぜ、泡状にした消火剤が広く使われているという。モリタは少ない水でも対応できる泡消火剤の開発に乗り出した。

消火剤は河川や田畑に流れ込む可能性もあり、環境面に配慮。水だけよりも10倍以上も効率よく火を消せる泡消火剤を完成させ、全国の消防で採用された。

we support ↓
RQ
災害教育センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろう!大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけ(す)きた(た)しんぶん』
「すけ(す)きた(た)しんぶん」

「すけ(す)きた(た)しんぶん」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ホランティアに来たよ」という
意味である

FEBRUARY
11
2018

阪神淡路にはじまり、東日本に磨かれて

この泡消火剤が十分に効果を発揮しない火災があった。現場は、津波で倒壊した宮城県気仙沼市の建物。近くを流れる川の水を使ったところ、うまく泡が立たなかった。海水が流れ込んでいた可能性もあり、坂本さんらは海水でも使えるように改良に取りかかった。

気仙沼市の消防関係者に当時の状況を詳しく聞き取り、部下2人と朝から晩まで交代で実験室にこもり、人工海水に薬剤を混ぜる実験を繰り返した。きちんと泡立ちか。金属を変色させたり腐食させたりしないか。コストはかさまないか。課題は山積みだった。納得できるまで改良を重ね、試作品は400以上にもなった。

約1年後、最もよくできた試作品を持って気仙沼市を訪れた。海辺で海水を使って試すと、淡水と同じように泡が立った。立ち会った地元の消防関係者は「相当有効な消火剤ができたと思った」と受け止め、2013年春に発売された。

「モリタ」は、海水で使える消化剤に続き、昨年4月には零下20度でも凍らない消火剤を開発した。坂本さんは「僕らの仕事は人の命がかかっている。だから慎重にもなるし、妥協もできない」と語る。その思いが開発チームを支えている。

(2017.12.17 神戸新聞NEXT)

阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼し、次世代に記憶をつなげる「神戸ルミナリエ」が12月17日夜、閉幕した。

会場の東遊園地(神戸市中央区)では、午後9時半ごろ消灯式が行われた。「しあわせ運べるように」の歌が流れた後、鐘が鳴り響く中、整列した警備員が「犠牲者のみたまに対し敬礼」と号令。約40万個の発光ダイオード(LED)が一斉に消灯すると来場者から大きな拍手と歓声が上がった。

姉とめいを震災で亡くした神戸市灘区の派遣社員の女性(45)は、子どもや孫ら5人で訪れた。東遊園地の荘厳な電飾を見つめ「震災を子どもらに伝えていかなければ」と話した。同市須磨区の女性(60)は仲のよかった知人女性を亡くした。毎年足を運び「元気に生きてるよと報告している」といい、会場にある鐘を鳴らして手を合わせた。



神戸ルミナリエ 消灯式

神戸ルミナリエは阪神淡路大震災の起きた1995年の12月に第1回が開催されました。街にともった灯は、多くの被災者を力づけました。消灯式のようなすはあまり報道されませんが、開催の意義を改めて思う厳粛な瞬間です。(画像:神戸新聞映像写真部)